

悪夢の果てに

短篇ミステリ

悪夢の果てに

悪夢の果てに

それは、まことに慈悲深い山道だった。藪の中に姿を消すこともなく、果てしなくどこまでも二人を案内しつづけてくれる。ただ、行く手に何があるのか、それだけがわからないのだった。

「大丈夫かい？」雅人は立ちどまると、後れている真弓をふり返った。

青ざめた少女は、雅人に追いつくと大きく肩で息をついた。真弓だけではない。雅人にしても、すでに精も根も尽き果てようとしている。

雅人は口惜しげに空を見あげた。彼は、太陽と時計を用いて方位を決定する方法を知っている。得意げに仲間に披露したのはつい昨日のことだったが、今日はあいにくの薄曇り。かりに晴れていたとしても、すでに頭上に陽のある時刻ではない。いつしか野鳥のさえずりは消え、周囲では、ときたま正体の知れぬ生物が薄気味悪い叫び声をあげるのみだった。闇と静寂が次第にあたりを支配しつつある。木々

のあいだからは、じわじわと冷気がしみ出していた。標高千メートルを越すこの辺りは、夏とはいっても、ひとたび日が暮ればむき出しの手足を震え上がらせる肌寒さだった。

「星野くんたちは、もう着いているでしょうね」

真弓が鳥肌のたった両腕をさすりながら声を震わせた。

「ああ」と雅人も元気なくつぶやいた。「あいつらは、僕たちが道に迷ったことを知ってるかな」

「どっちが先に着くか競争しようぜ！」

二股の分かれ道で、雅人が威勢よく叫んだのは三時間前――すでに遠い過去の出来事に感じられる。二人は道端の草むらに並んで腰をおろした。

「これからどうする？ ひき返したほうがいいんじゃない？」

雅人はため息をついた。「三時間は歩かなくちゃ道のわかる場所まで戻れないんだ。一か八か前進してみようよ。案外、ゴールはもうすぐそこかもしれない」

「まさか」真弓はぽつりともらす。「一時間ちよつとで着くはずだったのよ。どんなにどうどうめぐりしていたって、もう霧岳荘の近くなんかにいるわけがないわ。全然反対の方向に来ちゃったか、それとも通りすぎちゃったのよ」

しかし真弓にしても、ふたたび三時間の道のりをひき返すのは気がすすまなかった。「さあ、行こう」と雅人が立ちあがったときにも、あえて異議を唱える気力はなかった。

「すっかり日が暮れちゃったな、真っ暗だ」

雅人は周囲を見まわした。つい先ほどまでの薄暮は、いつしか漆黒の闇へと姿を変えようとしている。

「クマぐらい出てくるかもしれない」雅人はひきつった表情で笑ってみせたが、彼自身はその可能性をおおいに認めているようだった。「なあに、いよいよとなったらどこでも山荘を見つけて泊めてもらうさ」

二人はふたたび歩みはじめた。山中の冥路は、左へ右へと蛇行しながらも着実に二人を未知の地へと誘う。いつそのこと、この道が草むらのなかに消えてしまえばいい——真弓はひそかに思った。そうすればひき返す決心がつくもの。

遭難するときって、こんなじゃないかしら？

「家だ！」

時計はすでに八時をまわっている。とつぜん森がひらけた先にきらめく明かりは、

まさしく人家の灯火だった。雅人と真弓は、ひとことも発することなくその場に立ちつくした。

その山荘は丸太を二階建てに組上げただけの粗削りなものだったが、豆タンクのようなたくましい姿はいかなる風雪にも耐えられそうだった。二人の目を射たものは、数少ない窓からもれる黄色い光にすぎなかったが、それでも暗い山中を歩いてきた二人には、繁華街の入口のようでまぶしかった。

それから二人は救いの光を目指して駆けだした。戸口には黒ずんだ紐が下がっていて、ひっぱると中からしまりのない金属音が聞こえてきた。

「田村くんが頼んでよ」雅人の二、三步後ろに控えた真弓がささやいた。

「う、うん」

安息が期待できるこの山荘に歩みをとめた瞬間から、全身の疲労が鉛のように両足に流れこんでいる。断られたところで、もはや一歩も先へ進むことはできそうになかった。

やがて、扉のむこう側に人の気配がした。呼び鈴のひもをひっぱってから三十秒とたつてはいない。しかし二人にとっては長い時間だった。ゴトリと門をはずす音がすると、扉はゆっくりと内側にひらかれた。

背のまがった七十過ぎの老人だった。

「どなたじやな？」老人は無感動な声でたずねた。

「あ、あの……僕たち、霧ヶ岳に旅行にきた高校生なんです」雅人はごくりと唾を飲みこんだ。「霧岳荘という民宿に泊まるはずだったんですが、どうも道に迷ってしまったみたいなんです。あっちこっち歩きまわってみたんですけど、真っ暗で道もわかりません。それで」

背後で真弓が身を硬くするのが感じられた。

「できたら今夜ひと晩泊めていただけないでしょうか」

老人は乾燥した顔の中央に深く落ちくぼんだ両眼を、雅人から真弓へと詮索するように走らせた。「ここはわしの家じゃない。暗闇を手さぐりで行ったほうが、おまえさんたちのためじゃ」老人はしわがれた声でぶっきらぼうに言うのと、くるりと二人に背を向けた。

「あ、ちよつと！」

雅人があわてて一歩踏みだしたときには、すでにどっしりとした扉が行く手を阻んでいた。

チエツと雅人は舌打ちした。

「天の助けと思つたのに、とんだ主がいたもんだ。なんとも陰険な爺さんじゃないか」

「『ここはわしの家じゃない』って言ったわ。ご主人に伺いをたてにいったんじゃないかしら」

「とにかく不愉快だ。あの顔見たかい？ 疑惑に満ちた眼差しにげっそりとこけた頬、薄気味悪くむき出した八重歯——思い出すだけでもおぞましい」

「田村くん」と真弓は軽くたしなめた。

「あんな悪趣味な使用人を置いているようじゃ、ご主人さまのご好意なんてのも当てになりそうもないな」

「シート！」と真弓が強い調子でさえぎった。「誰か出てくるみたいよ」

ふたたび開かれた戸口に微笑をたたえて現れたのは、四十代半ばの温厚そうな男だった。

「お話はうかがいました。さぞかし大変だったでしょう。小さな家ですが、私のほうは一向にかまいませんよ。さ、どうぞ」

「は、はあ……」

二人は、あまりに対照的な待遇に一瞬とまどって顔を見あわせたが、すぐにおず

おずと彼にしたがって敷居をまたいだ。

戸口を入ったところは十畳ほどの広さの居間になっていた。壁は生木のままで、梁や柱が外部に露出している。低い天井にはランプの炎が震え、壁に映ったさまざまの影が静かにゆれていた。居間とはいってもたいした調度はない。数少ない品々のほとんどは、自分で木を削ったものようだった。絨毯も敷かれてなく、歩くと澄んだ足音が薄暗い部屋いっぱいに響きわたる。真弓はふと数百年前の欧州の民家にいるような錯覚を覚えた。

男は四人がけのテーブルに二人を案内した。三本の蠟燭を備えた燭台が淡い光を放って卓上の品を照らしている。半分ほど飲まれたコーヒー茶碗と開いたままになった読みかけのホフマンの小説がすべてだった。

「たいへんでしたね」と男はコーヒーをすすめて二人の向かいに腰かけた。山奥の住人ではあっても猟師や炭焼きなどの山林労働者のような粗野な印象はなく、むしろその物腰には都会的な上品な落ち着きがある。

「腹もすいたでしょう」

真弓と雅人は愛想よく笑って暗黙のうちに肯定の意を表した。男は愉快そうに笑った。

「たいしたものはありませんが、何か作ってみましょう」

男はどこへともなく「天羽、食事を二人分たのむよ」と叫んだ。最初に二人を迎え出た老人のことらしかったが、彼の姿は部屋のなかには見あたらなかった。その部屋には外への出口をのぞいて、ひとつしか扉はない。あとはぼっかりと口をあけた天井に消えていく階段とも梯子ともつかないものがあるだけだった。

「ほんとに助かりました。なんてお礼を言ったらいいか――？」

「大河内です」と男は微笑んだ。

「ありがとうございます、大河内さん。僕は田村雅人、こちらは小松真弓さん」

「ガールフレンドかね？」と大河内氏は楽しげに訊く。

「え？ さあ、まあ……」と雅人が口ごもると真弓は不服そうに彼を睨みつけた。

しかし雅人はそれに気づかない。

「僕たち、東京の渋谷高校の二年です。他の友だちと四人で霧ヶ岳に来たんですが、まあ、ご覧のとおりで……」

「霧ヶ岳？ そいつは聞いてなかった」と大河内氏は目をまるくした。

「ずいぶんと北の方に来てしまったなあ。ここは満山の頂上ちかくなんですよ。ここから霧ヶ岳じゃ五、六時間は歩きますよ」

「五、六時間！ あ、ごめんなさい」

素っ頓狂な声をだして真弓は顔を赤らめた。雅人もやりきれない思いだった。

「馬場峠をすぎてすぐに別の二人と別れたんですが、そこまで戻らないとダメですか」

大河内氏は気の毒そうにうなずいた。

「この山を下りる道は三つありますがね、霧ヶ岳なら結局はそこまで戻るのが一番の近道です。しかし、あそこにはちゃんと標識があったでしょう？」

「ええ」雅人は顔を伏せた。

「むこうが正しい道ってことは判っていたんです。それが、別の道があるんじゃないかって話から、競争しようということになって……」

「若いね。そのエネルギーはうらやましいよ」

大河内氏は高らかに笑うと、思い出したように立ち上がった。

「寝室の用意をしてこよう。しばらく使っていないから少し埃っぽいかもしれないが、ベッドはちゃんと二台ある——君たちは同じ部屋で構わないよね？」

「同じ部屋？」

山荘の大きさからして当然予想できたことだが、あらためて大河内氏から聞かさ

れると血管は激しく波打ちはじめた。真弓はなにと言わなかった。

「もうすぐ天羽が食事を持ってくるでしょう。たっぷり食べて、今日はゆっくりとお休みなさい」

大河内氏は急勾配の階段を上って二階へ消えていった。

雅人はそっと真弓の様子をうかがった。頬杖について雅人とは反対側の窓の外へじつと視線を投げている。窓の外は墨をこぼしたような闇——なにを見ているんだろう？

いま想い出しても気恥ずかしくなるような手紙を真弓に手渡したのは春だった。以来、映画にも公園にも行った。お互いの家を往来もした。けれども未だに二人の呼び声は「田村くん、小松さん」。雅人はテレビドラマのように「雅人」、「真弓」と呼びあう仲に憧れていたのだが。

所詮はフィクションの世界なのかな？ 雅人はひとり照れ笑いした。

なんとなく気まずい雰囲気は、天羽老人が食事を運んできたことによって救われた。老人は無言のまま皿を配ると、ひとこと「ごゆっくり」と呟いて立ち去った。

二人の前に置かれたのは、コンビーフに馬鈴薯と玉葱を炒めあわせた料理だった。湯気とともに顔面にせまるコンビーフの油っこい香りに、真弓と雅人の胃袋は盛ん

に催促の叫びをあげた。他にも四、五切れのフランスパンと一皿の生レタスがある。さらに赤ワインまで出てきたのには恐れ入った。

「へえエ！」と真弓が目を見はった。「おいしそうじゃない。『たいしたものはありませんが』なんて大河内さんも人が悪いわ」

雅人ははやる気持ちでパンに手をのぼしながらも、真弓をからかってやりたい一心で意地悪く反論した。

「いやいや、冷静に見れば簡単な食事には違いないさ。缶詰を開けてぶつ切りの野菜と一緒に火を通したただけだからね」

「性格悪いわね、どうして素直に喜べないのよ！」

「ものごとを正しく観察しようとしているのさ。僕だって、君に劣らず感謝はしているんだ。その証拠に――」と雅人は、右手にしていたものを頬張った。「ほら、もうパンが一切れ消えてしまった」

「あきれた！ 一口で食べちゃったの」

「まずは乾杯」

二人はいたずらっぽい仕草でグラスをぶつけあった。雅人も真弓もワインの味など判らない。ただその甘い口あたりに十分に満足した。

そこへ大河内氏が戻ってきた。

「やあ、元気が出てきたね。結構、結構」

二人はきまり悪げに顔を見合わせた。

「そういえばさつき、ほかの友だちと四人で来たと言ってたね？」

「ええ、霧ヶ岳に民宿を頼んであるんです」

雅人は、コンビーフと馬鈴薯と玉葱を、器用に積みかさねて口に放り込んだ。

「明日は、朝早くに天羽を町にやるんだ。買物やらなにやらがあつてね。そこで、
どうだろう、彼に言いつけて宿に連絡をしておいたら？　そうすれば友だちも安心
するだろう」

二人は怪訝そうに首をかしげた。

「あしたは昼頃まで寝ないと疲れも取れまい。それから発つたのでは霧ヶ岳に着く
のは夕方遅くになって、下手するとまた迷子になりかねないよ。一日ゆっくりして、
明後日に出発してはどうかね」

雅人と真弓はぱっと顔を輝かせた。

「いいんですか？　じゃあ：お願いしようかな」

「ぜひそうしたまえ。私も退屈しないですむよ。宿の名はなんというんだね？」

「霧岳荘です」

「連絡先はわかるかね？」

雅人がメモを手渡すと、大河内氏は丁重にそれを書き写した。

やがて料理はすっかりと片づけられ、いままでの空腹は嘘のようにおさまった。

「大河内さんは、こんな山奥で何をしていらっしやるんですか？」

話もいろいろとはずみ、すっかり大河内氏とうちとけた雅人は、ふと尋ねてみたくなった。

「私かね？ 薪を割ったり獣を撃ったり、絵を描いたり」と大河内氏は自嘲するよ
うに小さく笑った。

「なんて言えばいいかな。芸術家くずれの隠遁生活者とも思ってくれたまえ」

「絵描きさんですか」

大河内氏はあいまにうなずいた。

「どんな絵をお描きになるんですか？」

「見せようか：：ついてきたまえ」

雅人と真弓はグラスに残っていたワインを乾すと、大河内氏にしたがって部屋を出た。細い廊下が続き、突き当たりに台所が見える。

「ここが天羽の部屋だよ。なにか用事があったら遠慮なく戸を叩きたまえ」
大河内氏は左手の扉を指差すと反対側の部屋に二人を招き入れた。そこは四畳半ほどの小部屋になっていて、一步足を踏み入れるとほんのりとテレピン油の香りが漂ってきた。

大河内氏は天井のランプに灯を入れた。

アトリエと呼ぶにはあまりに狭い部屋だった。三方の棚はキャンバスで埋まっており、部屋の真ん中には汚れた布をかけたイーゼルが置いてある。棚の間隙を縫って小さな窓がいくつか設けてあったが、そこから射し込む光量などはたかが知れているように思われた。奥にもうひと部屋続いていて、そこには簡素な机や寝台が置かれている。

大河内氏は適当に四、五枚の絵を取り出して持ってきた。それはすべて殺風景な海辺の風景だった。いずれも嵐の吹き荒れる海で、空には鉛色の雲がたちこめ、海面には波濤が渦巻いている。砂浜には一艘の漁船が傾いて横たわっていた。

「昔すんでいた土地だよ」

「なんだか寂しい景色だわ」と誰にもなく真弓が言った。

「どんな風景だったかも忘れてしまったよ。どんなにか美しい土地だったかもしれ

ないが、これがいまの私のイメージなんだ」

大河内氏は奥の棚から別の絵を取り出すと、二人に見せるわけでもなく、じっとその絵に見入った。

「これはむかし描いた絵なんだよ」

それも海辺——おそらくは前の絵と同じ海を描いたものだったが、画面には澄み透った青色が一杯にあふれ、人物も描かれていた。白い帽子をかぶった二十歳くらいの婦人が海外線に沿って歩きながら、幸福そうな笑顔をこちらに向けている。

「私も恋をしたことがあるんだよ。運命に背を向けられた恋をね」

大河内氏は絵をすべて棚に戻すと明るく笑ってみせた。

「二十年か？ずっと昔のことだよ。もう休むかね？」

雅人は遠慮がちにうなずいた。

「大河内さん、どうもあまりよくない思い出を——」

「今にしてみればどうでもいい些細なことさ。一生に翳さず傷など存在しない。どんな絶望も生への執着の前には道をゆずるのだよ。恋など青春時代の気まぐれにすぎない。真の愛は独占欲など伴わないものだよ」

大河内氏は片隅の丸椅子に腰掛けた。

「二階に仕度がしてある。すまないが二人だけで行ってくれないか。私はもう少しここにいます」

「おやすみなさい、大河内さん」

それは、階段を上りきったところが扉もなくそのまま板の間になっている、屋根裏のような部屋だった。大きく傾斜した天井は、一方の壁際では頭がつかえるほどになる。窓は狭い壁面の腰ほどの高さにとつあるきりだった。いくぶん湿気の籠もったその部屋には、二台の大きな寝台が窮屈そうに並んでいたが、それはいかにも部屋に不釣り合いで、場違いな感を免れなかった。

「あれは強がりだな」と雅人が評した。「あのひととの日々が堪らなく懐かしいのさ。失恋の傷痕がいまだに胸の奥底で疼いているんだ。それを必死に否定しようとしている――逃避過剰型の防衛反応ってやつだ」

「いいじゃない、それが普通だわ。そんなにあっさり忘れられるもんですか」

「でも二十年ちかくも昔のことだよ。若者の恋煩いは微笑ましくても、中年の懐古趣味はみっともないな。もう少したった君にも普通に思えなくなるよ、きつと」

「わかったようなこと言わないでよ。あたしのほうが三ヶ月も年上なのよ」

「ごめん」と素直に引きさがった雅人は、ランニングシャツ一枚になって硬めのベッドにもぐり込んだ。

「君はどうする？ 服着たままじゃ寝苦しいと思うけどね」

「——ここで下着姿になれっていうの！ あいにくさま、変な真似したら只じやすまないからね」

「ハイハイわかっております、ま——小松さん」

雅人は布団のなかで首をかしげた。普段はざっくばらんに話せるのに、名前を呼ぼうとすると息が詰まる。はっきりと不自然な声になってしまふ。どうして、たったひとこと、「真弓さん！」と口にできないのだろうか？

「ちくしょう！」

「え、なに？」と真弓が不思議そうに首を伸ばした。

「い、いや、なんでもないよ。星野のやつ、もしも搜索願を出してなかったらぶっ殺してやる」

やがて雅人の声はむにやむにやと弱くなり、真弓がはっきりと聞き取ろうと身を乗りだしたときには、彼はすでに平和な寝息をたてていた。

真弓はクスリと笑った。

人は一生に一度だけ打算のない恋をする——不意にもらった手紙が、いきなりラ・ブリュイエールの引用だった。そして、ぎこちない調子で「これがきつと僕の初恋なんだ——ちよっぴり知ったかぶりで口が悪いけど、本当はすごくナイーブで子供っぽい臆病者。大河内さんにあたしのことを訊かれて、満足に返事もできないんだから。」

しばらくのあいだ雅人の寝顔に見入っていた真弓も、一日の疲れからまもなく快い眠りに落ちていった。



なにかに眠りを妨げられて、真弓はふと目を覚ましてベッドの上に起き上がった。外ではフクロウがうつろな声をあげている。窓からのぞいた光景は深い霧が立ち込めて幻想的だった。霧にさえぎられた月明かりに懸命に腕時計を透かして見ると、午前三時だった。

真弓はぴくりと身体を震わせた。

誰かが歩いている？

いつから始まっていたのか、非常にゆっくりとした用心深げな歩みだった。かす

かな足音の所在をつきとめようと、耳をそばだてた。雅人は隣にいる——もつと遠くだ。

やがて、建物のどこかがギシッと軋んだ。

階段だわ。

ここにアがって来たときに、階段の三段目が軋んだことを思い出した。足音はこちらへやって来る。

真弓は真っ暗な階段のほうを見つめたまま、手さぐりで隣の布団に手を伸ばした。

「田村くん」

「起きてる」と息を殺した声が応えた。

「あの足音はなんだい？」

「階段をアがって来るわ」

階段の降り口がぼおつと明るくなり、ついで暗闇のなかにロウソクの炎が浮かび上がると、次第に高さを増して、人の肩あたりで止まった。侵入者が階段を上りきって床に立ったのだ。

ロウソクの炎は静かに前進を始めたが、真弓がアわてて布団に顔を埋めると同時に、ぴたりと動きを止めた。どこから吹き込むのか、かすかな空気の動きが炎を揺

らめかせている。

「起きとるようじゃな」

ロウソクの光に目がくらんで顔はよく見えないが、たしかに聞き覚えのある天羽老人の嗶れ声だった。

「あんたらは不運なお人たちじゃ」

真弓と雅人は、警戒心を解けぬままに身を堅くした。昨夜の天羽の、薄気味の悪い陰湿さがまだ頭に残っている。

「夜が明けたら、すぐに山を降りなさい。もうひと晩泊まろうなんて滅相もない」

「なぜです？」雅人がかすれた声を発した。

炎の向こうの声は一瞬躊躇した様子だった。

「あんたらは、あの男を信用しておるらしい」

「あの男？」

「大河内じゃよ。しかし、あれは恐ろしい殺人鬼だぞ」

「なんですって？」

「やつがこんな山奥に住んでいるのは、なんのためじゃと思う？ あんたらも、おいおいと奇妙なことに気づくじやろう。それをやつに気取られたらおしまいじゃよ。」

やつは安全のためならばなんでもやる。到底あんたらも生きてはここを出られんよ」
ロウソクが窓の方へ揺れた。

「裏の森にな、この山荘で殺したモンが二人ばかり埋まっとる」

真弓は自分の耳を疑った。ワインを飲みすぎたせいで変な夢をみているんじゃないかな。いかしら。殺したモン：って人殺し？ 殺人鬼！

「どうして、そんなことを僕たちに？」

「わしは先代から大河内家に仕えておってな、いろいろと世話になったのと、最初の殺人にはちよつとした理由もあつたもんじゃから、あの男を庇ってやろうとこんな山奥にまでついてきた。じゃが、やつはとんでもない悪魔じゃつた。自分の過去を知っているのではないかとわずかでも怪しんだら、迷うことなく次々と人を殺してしまえるような奴だったのじゃ。わしもいい加減恐ろしくなってきた。あしたは警察に行くつもりじゃ。あんたらも、くれぐれも気をつけなされ。そして、できるだけ早くここを出てしまふことじゃ」

老人は、二人の反応を確かめるようにしばらく黙って立っていたが、やがてロウソクが大きく揺れると、老人の姿は再び影を震わせながら階下に消えていった。

空が白みはじめた。

真弓と雅人は、寝台の上でじつと顔を見合わせていた。あれから一睡もしていない。天羽老人の突拍子もない告発と寝不足とが重なって、二人の重たい頭のなかでは、なにものかがガンガンと警鐘のように鳴り響いていた。五感は目を覚ましていながら、その実なにも知覚できていなかった。

「あの爺さん、頭がおかしいんだ」と、雅人が無理に笑おうとした。

「でも、本当だったら？」

「君はあんな気違い爺さんの言葉を信じるのかい？　初めて会ったときの態度を覚えてるだろ。ありやあ絶対にまともじゃない。妄想狂だよ」

「逆だったらどうするのよ。こんな山奥で暮らすほうが正気じゃないわ。天羽さんだって、いくつも人殺しを見逃してきたりしたら、あんなふうに陰湿になっても不思議じゃないわ」

真弓は次第に苛立ってきた。

「とにかく、もう霧岳荘に行きましようよ。みんなだつて——」

「ナンセンスだ」

真弓は唇を噛んだ。また強がり——今度は迷子じゃすまないんだから！

「階下へ行こう」と雅人はぶつきらぼうに言った。「窓から飛び降りて逃げるわけにもいくまい？」

二人は布団から這い出した。身づくろいといっても、服は着たままで、洗面所も無いから、たいしてすることも無い。真弓が髪をとかす頃には、雅人はすっかりと手持無沙汰になって、財布の小銭をもてあそんでいた。

「あつ」

「どうしたの？」

雅人の軽い叫びに、真弓はヘアブラシを片手にふり返った。

「金を落としたんだ。ベッドの下に入っちゃった」

「莫迦ね、取れる？」

雅人はごそごそと暗い寝台下にもぐり込んだ。夜はすっかり明けていたが、朝日はそこまでは届かなかった。慎重に床をなで回すと、細長い板が何枚も張られた様子がよく分かる。百円玉に一瞬手が触れたが、それは意地悪く指先から逃げてしまった。

雅人は舌打ちして、もう一度床をまさぐった。すべすべとした床板の感触、そして――？ 雅人は首をかしげた。

「どうしたの、取れた？」

すっかり準備を終えた真弓が背後から声をかけた。

「変なんだ」と雅人は這い出した。

「なにか床にこびりついているみたいだ。所々ざらついている」

「そんなこと、どうでもいいわ。お金は取れたの？」

「いや：：ちよつとベッドを動かしてみよう」

真弓は露骨に嫌そうな顔をしてみせた。

「いちばん手っ取り早いさ、結局は」

二人は寝台の両端に手をかけてグイと力を込めた。大きさの割には軽く、比較的容易に持ち上げることができると、数十センチ動かしたところで、ふいに真弓が手を離した。

「やだっ、なによこれ！」

すさまじい音を立てて寝台の脚が床に落ちた。

雅人は訝しげに、いっぱいに見ひらかれた真弓の視線の後を追った。寝台に隠れていた床の上には、本能的に吐き気を催させるような赤黒い汚れが大きく広がっている。

「血：じゃないの？」

真弓は、汚れの上にかがみ込んだ雅人に恐る恐る尋ねた。

「そう見えるけど：分からないよ。見たことないもんな。だけど血だとしても、これは相当に古いものだよ。すっかりと乾いて、赤というよりも茶色か黒だもの」

二人は慎重に寝台をもとの位置にもどした。

やっぱり、大河内は殺人鬼だったんだ！

真弓が、衝撃の大きさにめまいを感じながら、ふと雅人の様子を窺うと、彼は血痕らしい汚れをさして重大視するふうもなく、割合と平気な顔をして階段を降りようとしている。

もう、なんて呑気なのかしら！　きっと朝ごはんの中味のことくらいしか考えていないんだわ。

日頃たくましく思っていた雅人が、いまの真弓にはひどく頼りなく感じられた。

階下へ降りていくと、ちょうど大河内氏が、猟銃を手にして外から帰ってきたところだった。

「やあ、おはよう。ずいぶんと早いね、まだ七時前だよ」

一瞬、大河内氏が発砲するのではないかと青ざめた真弓は胸をなでおろしたが、彼の昨夜同様の快活さが、いまでは白々しいものに感じられて仕方がなかった。

「よく眠れたかね？」

「ええ、おかげさまで」と雅人も、猜疑心の欠片すら見せない明るい笑顔で応えている。真弓は腹立たしくなってきた。

無邪気にもほどがあるわ！

「ところで、このあたりはすぐ霧が深いんですね。朝起きてびっくりしました」

「ああ、ちよつとした窪地になっているからね。でも、もうじき晴れてくるよ」

雅人と大河内氏は、一向に構わずに楽しげなやりとりを続けている。その有様を見ていると、真弓でさえも、深夜のあの話は夢ではなかったかと、キツネにつままれたような気持ちになってきた。

油断させる気だわ。

真弓は、警戒をゆるめまいと必死に自分に言い聞かせた。

「いま朝食の支度をするからね、ちよつと待ってくれたまえ」

大河内氏は、小脇に銃を抱えたまま居間を出ていった。

「抜け目ないわ」と真弓は小声で囁いた。「逃げようとしたら、すぐに撃ち殺す気

よー

雅人は素知らぬ顔で返事をしなかった。

朝食はさっぱりとした簡単なものだったが、そんなことは真弓にとってはどうでもよかった。真弓の脳裏では、先ほどからたった一つの疑問だけが複雑に渦巻いている。

大河内は、あたしたちが血痕を見つけたことに気がついたかしら？ もしそうだったら、どうやってあたしたちを殺そうとするかしら？

ううん、あいつは今まで外にいたんだもの、ベッドが立てた物音は聞いていないはずよ。それにベッドはちゃんと元の位置に戻したから、部屋の様子を見たって分かりっこない。

でも——真弓は不安に襲われて、そっと天井を見上げた。本当に元どおりに戻したかしら？ もしも埃のあとがずれてでもいたら……。

真弓は気持ちを静めようと、目の前のティーカップに手を伸ばして、思わずはつと息を呑んだ。

この紅茶！

びくりと震えた拍子に少量の紅茶が受け皿にこぼれた。

真弓は、大声で泣き出してしまいたいのを懸命に堪えて雅人を見やった。彼は落ち着き払った様子で、すでに相当にティーカップを傾けている。

倒れないでよ、と真弓は心のなかで叫んだ。

相手が真弓ひとりとなれば、大河内は愛想のよい主人役の仮面をかなぐり捨てて襲い掛かってくるに違いない。

大河内氏が雅人との談笑に没頭しているのを見計らい、真弓は、受け皿にこぼれた紅茶を指先につけてそっと唇に運んでみた。格別に奇妙な味はしない。ただ、ちよつぴり甘すぎるような気がした。

「ちよつとお手洗いをお借りします」

真弓は席を立った。声が震えているのが自分でもよく分かったが、そのことを気にしている余裕はなかった。

真弓は足早に台所へ駆け込むと、ふり返って誰もいないことを確かめてから、棚に並んでいるビン類に目を走らせた。ありふれた香辛料ばかりだ。いくつかある引き出しもあけてみたが、わずかばかりの食器が適当に放り込まれているだけだった。

真弓はホッと息をついた。

どっちにしても、こんなところに毒薬なんて置かないわね。

昨日と変わらない大河内氏の態度や雅人の平静さを思い出して、真弓は呟いた。「田村君が正しいのかもしれないわ。ベッドの下の血痕だって、人間のものかどうか分からないじゃない」

台所を出た真弓は、天羽老人の部屋の前で立ちどまった。

結局、あのお爺さんが狂っていたのよ。どんな部屋かしら？

真弓は取っ手に手をかけた。天羽老人は、大河内氏の言いつけで町へ行っているはずだ。

扉は音もなくすっと内側に開いた。窓があいていて、生温かい風が不快な臭気を運んできた。――そこは、血の海だった。

真弓は、喉元まで出かかった悲鳴をкаろうじ堪えると、勇を奮って部屋に足を踏み入れた。

粗末な椅子は砕け散り、寝台のシーツはずたずたに引き裂けて真紅に染まっっている。

バケツで赤ペンキをぶちまけたような壁面からは、今も無数の赤い糸が滴り落ちていた。床の大きな血溜まりからは、何か重いものを引きずった痕跡が続いている。それは窓下の草むらで再び広がり、そこで消えていた。天羽老人の亡き骸はその部

屋にはなく、また他のいかなる生物の屍体もそこにはなかった。何にせよ誰にせよ、血飛沫の主はすでに運び出されたものらしい。ふと足もとを見ると、たつぷりと血を吸ったジャックナイフが落ちていた。

背筋をぞおっと冷たいものが走った。

もはや疑う余地はなかった。そして大河内に不審の念を抱かせてはならない。二階の血痕はもちろんのこと、この死の部屋を見ることは即死刑宣告を意味した。

無知を演じきれるかしら？ それはあまりに絶望的な戦いに思われた。とにかく今は、大河内と雅人のところに戻るしかない。家の外に出るには、そこを通るしかないのだ。

二本の脚は、真弓の恐怖に関係なく、着実に一步二歩と居間に近づいていく。扉に手が触れた。死地に赴く思いだ。

負けちゃダメ！ 真弓は目をつぶった。

それは平和な光景だった。二人の男の平凡な朝食風景にすぎない。しかしその平凡ゆえの異常さに、真弓の神経はめちゃくちやになりそうだった。

「さつきはイノシシを撃ちに行ってたんだ」と大河内氏は言っていた。「今夜は猪鍋をご馳走しよう」

「そのことなんですが、僕たち、やっぱり今日帰ることにしました」

雅人からこの言葉が出たのは、真弓には意外だった。大河内氏の顔からはすっと微笑が消えていく。

「どうしてかね。天羽はもう行かせたよ。友だちにもじき消息は伝わるだろう」

「いえ、うっかりしていたんですが、霧岳荘の部屋は、明日の午前までしか取ってないんです。ですから、明日の出発すると合流するのが難しくなってしまう」

「なるほどね、よくわかったよ」

しばらくの沈黙の後、大河内氏の無表情な顔が不気味にゆがんだ。

「しかし駄目だな。昨夜がけ崩れがあったらしくてね、下へ降りる道は通れなくなっている。開通するまで待ちたまえ」

「でも、天羽さんは町へ行ったんでしょう？」

大河内氏は一瞬言葉につまった。

「彼は、けものみちを通って行ったんだ。君たちでは無理だ」

「行ってみますよ」

「だめだ。君たちを危険な目にあわすわけにはいかないからね」

大河内氏は、初めて真弓のほうに顔を向けた。

「どうしたんだね？　顔色が悪いね」

「べつに：、ちよつと気分が悪くて」真弓は顔をそらすと、ようやくそれだけ答えた。

「そらみたまえ」と大河内氏は、雅人に向かってにやりと笑った。

「君たちは疲れているんだ。きょう一日、ここにいるんだね。私は、少し薪を割つてこよう」

大河内氏は手斧をもって出て行った。

「ちえつ、親切なのは分かるけど少々ありがた迷惑だな。下手すると、星野たちとは二学期まで会えなくなるぞ」

「一生かもね」

真弓の生気のないかすれ声に、雅人は驚いたような顔をしてみせた。

「田村君は、まだあの人を信じているの？」

雅人の悠長さがやりきれず、堰を切ったように涙があふれてきた。

「いまの態度が分からなかったの？　あたしたちを逃がすまいとして、あんながけ崩れの話までつちあげたのよ。いよいよあたしたちを殺す気だわ！」

「シート、そんなこと言うものじゃない」と、雅人は真剣とも冗談ともつかぬ口調

で遮った。

「穏やかじゃないな。あんなベッドの下の汚れと、気違い爺さんのたわ言だけで疑うのかい？ 気にするなよ、あんなもの。いつのものかも分からない、本当に血なのかも分からない。血だとしても、人間のものだという証拠もないのだし、それに――」

「ちがうわ！」真弓は涙声で叫んだ。

外では薪を割る音が続いている――この音がしているあいだは大丈夫。

「あの人は、まちがいなく人殺しよ。天羽さんだって、町なんかに行ったんじゃない。殺されたのよ」

雅人は、困ったといったふうに顔をしかめた。

「証拠を見せてあげるわよ！」と真弓は雅人の手首をつかんだ。

天羽老人の部屋の惨状を見せられても、雅人は一向に平気そうだった。

「これはすごいね。クマでも入ったのかな。あとで大河内さんに訊いてみなきゃ。

まさかりを振り回してクマと決闘――なんてね」

「ばか！」

真弓の平手が雅人の頬を打った。

そして、そのままぴたりと静止して耳をすませた。

いつしか、薪を割る音が止んでいる。

「まずいものを見てしまったな。もつとも、隠す気もなかったんだがね」

真弓がふり返ると、大河内氏が、手斧を胸の高さに構えてゆっくりと入ってきた。

「夜中に天羽から話を聞いていたのは知ってたよ。だが、それだけじゃなさそうだな。ベッドの下の血痕も見つけたかな」

真弓は駄々っ子のようにかぶりを振った。

「まあいい。どのみちもうおしまいだから、ひとつ種明かしをしておこうかね」

大河内氏は後ろ手に戸を閉めて鍵をかけると、用心ぶかく床のジャックナイフを拾い上げてベルトにはさんだ。

「十六年前、私はひとりの男を殺したのだ。彼は、私から美しい少女を奪っていただけでなく、別の女をつくった果てに彼女を捨て去った。彼女は悲嘆の挙句に身投げしてしまった。私は、彼女を救えなかった自分を呪い、彼女を死に追いやった道楽者を殺さねばならないと決心したのだ。しかし私は、復讐のためとはいえ自分の生活をあっさりと投げ出せるような純な男ではない。人間には自分の生命・身体

を守りぬく義務があるのだ。私は自分の安全を脅かす危惧のある人間を次々と始末した。例えば、男の頭を割るために使った手斧を買った店の主人は、当然死ななければならなかった。私と彼女の仲を知っている人間も危険だった。そんなわけで私は、五人の人間を殺したあとで、天羽——彼だけは信用していたのに残念だよ——と一緒にこの山奥に身を潜めたのだ。しかし、この山荘にも危険な人間がやって来た。ひとりは、どこでどう嗅ぎつけたのか愚かなゆすり屋でね、もうひとりは、君たちのように道に迷った旅行者だったのだが、まずいものを見つけてしまったのだ。もちろん、彼らは生きて山を降りることはできなかった。裏に埋めたよ。そして君たちがやって来たというわけだ」

大河内氏はゆっくりと手斧を頭上に振りあげた。

「言いません、絶対に言いませんから……お願い！」

真弓は後ずさりしながら必死に叫んだ。大河内氏はにんまりと笑って、うんうんと頷いた。そして、そのままの体勢で一步前に踏み出した。

「みんなそう言うんだよ」

何か武器になるものは？ 真弓はめまぐるしく室内を見回した。

天羽老人を屠ったナイフはすでに拾われてしまっている。他には？ 戸口にはス

コップが立てかけてあるが、そこに行くには、殺気に溢れた凶刃の下をかいくぐらなければならぬ。かたわらの机の引出しに小刀かハサミくらいあるかもしれないが、そんなところを漁っているあいだには、まちがいなく真弓の頭は砕かれてしまおうだろう。

多少なりとも頼りになるのは雅人だったが、彼とて素手で立ち向かって、どれほどの抵抗ができればよいか。実際、雅人は青ざめた顔で、金縛りにあつたように身じろぎもせずに突っ立っているだけだ。

「すでに何人殺したか、自分でもはっきりと覚えていないくらいだよ。慣れてるかから大丈夫、すぐに楽にしてあげる」

大河内氏は、もう手をのばせば届く距離にまで近づいている。真弓は思わず身を引こうとして、背中をしたたか強く壁に打ちつけた。もう、これ以上距離をひらくことはできない。

真弓は観念して目をつぶった。頭の中をさまざまな思いが駆けめぐり、すうっと意識が遠のいて膝がくずれた最後の瞬間に、ゲラゲラと笑いはじめた雅人の声を聞いた。

「やりすぎですよ、大河内さん。僕も一瞬、本気かと思ってしまう」

「なかなか手の込んだ芝居でした。でも、女の子には刺激が強すぎますよ」

床にへたり込んだ恰好のまま、真弓が恐る恐る目をあけてみると、手斧を振りかぶった大河内氏を前にして、雅人が意味不明なことを得々と話していた。

なに？ 雅人くん、おかしくなっちゃったみたい……それとも、あたしが変なのかしら。

「すべてがでっちあげだったんですね」

雅人はいたずらっぽく片目をつぶってみせた。

「天羽老人なんて、もともと存在しなかったんだ。あれは素晴らしい演技でしたよ。メイキヤップも身のこなしも、すっかりと不気味な老人になりきってましたね。

今回の殺人鬼云々というお話は、すべて僕たちを観客にしたスリラーショー、あなたの一人芝居にすぎなかったんです」

大河内氏は、とぼけたような表情で首をかしげてみせた。襲撃態勢は解かれて手斧は下を向いている。

「ずいぶんと凝ってましたね。たぶんイノシシかなにかのものでしようが、部屋中

に大量の血をぶちまけたりして――あとで掃除が大変でしょうに。僕は手伝いませんからね。それから二階のベッドの下の汚れですが、あの部屋は昔は、野山で仕留めた獲物を解体するのに使っていたんじゃないですか？ タヌキとかシカとか、そんな動物たちの血の痕だったんだと思いますね。大河内さん、あなたは客が来るたびに、こんなことをやって喜んでいるんですか？」

大河内氏は、見破られたのが面白くないとでもいうように、ボソボソと口籠った。「こんな山奥にいと退屈でね、たまの来客を思い切った趣向でお迎えするのが楽しみなんだ」

「ひどいわ！」と真弓は跳ね起きた。

「あんまりです、あたし：あたし：：」涙があふれて、あとは言葉にならなかった。大河内氏はバツが悪そうに頭をかいた。

「すまなかつたよ。しかし、どうして分かったんだね？」

「ヒントはありましたよ」

「ヒント？」真弓は思わずオウム返しに訊いた。

「大河内さん、あなたには天羽老人を殺せたはずがないんだ」

大河内氏は納得がいかない様子で首をひねった。

「もしも殺人が実際に行なわれたのだとしたら、一体それは何時頃のことでしょう？　三時頃に僕たちの部屋にやって来た天羽老人が、はたして本物だったのか、それは議論の余地があるかもしれません。薄暗いロウソクの明かりのなかでしたからね。ひよつとしたら、その前に彼は殺されていたのかもしれませんが。でも、この部屋の血痕の真新しさを見ますと、大量の血が流されたからは、まだ何時間と経っていないように感じられます。明け方近くの出来事だったと考えざるを得ないんです。そうすると、ちよつと変なことになります。僕たちは、天羽老人の話聞いたあとは一睡もしていないんですよ。一方、この家は、絨毯も敷かれてなくて防音性は全くないといっている。歩くだけでも、家中に足音が響きわたるほどです。もしも殺人などという大仕事が行われていたら、当然それなりの物音がして、僕たちの耳にも入っていたはずなのです。しかし、今朝は静穏そのものでした。言いかえれば、午前三時に二階にやって来たのが本物の天羽老人であれ、それとも別の誰かの変装であれ関係ないのです。要は、殺人という行為がなされる機会がなかった、ということです。それにもかかわらず、明らかに大量の血液が静粛のうちに流されています。ここに僕は作為を感じました。そしてすぐに、すべてが狂言じゃないかという考えが浮かんだのです」

雅人は少し間をおいた。

「たしかに素晴らしい演技でしたが、ひとつだけ、どうにもならないことがあります。それは、大河内氏と天羽老人とが同時に存在できないという物理法則です。僕もしばらくは気がつかなかったのですが、あなたと天羽老人とは交互に登場しこそすれ、一緒に姿を見せることは一度もなかった。これが僕の推理の発端になりました」

「負けた。完全に降参だよ」

説明を聞き終わると、大河内氏は照れくさそうに苦笑いした。

「ところでどうだろう。今日帰らなければならぬと言ったが、せめて早めの昼食だけでも食べていかないか？ 夕食の予定だった猪鍋を作ってしまったおう。それでお別れということにしようじゃないか」

雅人も真弓も、この提案に異議はなかった。歯ごたえのある猪肉を満足のいくまで味わって、二人が名残を惜しむ大河内氏に別れを告げたのは午前十一時半のことだった。



隣に雅人がいることが、やたらと意識されて仕方がなかった。ただ並んで座っているというだけなのに、不思議と鼓動が早くなって息苦しい。こんなこと、今まではなかったのに――黄昏時の最後の残光を体一杯に浴びながら、真弓は戸惑いを感じていた。

手紙をもらってオーケーしたときも、一緒に映画を見に行ったときも、ほんの面白半分、ただの遊び友達のつもりだったのに、なぜ？

霧岳荘に着いてみると、星野哲郎と森由紀子は、二人の遅延を当然のことのように受け止めて、全く心配などしてくれていなかった。雅人と真弓は、前日の冒険談を散々笑いものにされたあと、逃げ出すように前庭の丸太を割ったベンチにやって来たのだ。背後の霧岳荘からは、夕食後のにぎやかな団欒の声やギターの調べを伴った歌声が漏れてくる。

真弓は、雅人に対する気持ちが一種の尊敬に似たものに変わりつつあることに気がついた。

「雅人くん」

声の調子がおかしくなっているかとかと気をもみながら、真弓は雅人の横顔に向かって話しかけた。

「見直しちゃったわ。大河内さんと天羽老人が同時に現れないなんて、よく気がついたわね。すごいな」

雅人は、やや緊張した面持ちで真弓に向きなおった。

「君は、あんな穴だらけの話を真に受けて聞いていたのかい？」

「だって……」いかにも雅人らしい露骨な言い方が恨めしかった。

「大河内さんのお芝居、すごく上手だったじゃないの。ぜんぜん分からなかった」

「そうじゃないよ」と雅人は頭を振った。「真に受けていたのかっていうのは、僕の話のときさ」

真弓は訝しげにまばたきした。

「ねえ小松さん、もしも大河内さんが天羽老人に変装するとしたら、どれくらいの手間がかかるだろうか？」

「さあ……肌の具合がぜんぜん違うし、歯も入れ歯でしょう。それから服も着替えて……五分か十分か、もつと時間がかかるかしら」

雅人は大きくうなずいた。

「そうさ、当然そのくらいはかかるはずだよ。しかるにだよ、僕たちが最初に呼び鈴を鳴らしたとき、ものの三十秒と経たないうちに姿を見せたのは、天羽老人だ

ったんだ。大河内さんは、僕たちが道に迷ってあの山荘にたどり着くことなど予期できたはずがない。それじゃあ、僕たちが訪れたとき、大河内さんは一体何のために天羽老人の扮装などしていたのだろうか？」

「偶然メーカーキヤップの練習でも——」

「コーヒーを飲みかけで？ おまけに本も読みかけの状態だった。不自然だよ」

「……」

「このことは何を意味するだろうか？ 答は簡単さ。天羽老人は実在の人物であり、現実に大河内さんに殺されたんだよ」

真弓は思わずアツと叫んだ。

「でも、雅人くんは言ったわ。あんなに静かで、殺人があつたはずがないって。天羽さんは何時に——」

「すでに何人も殺しているベテランと七十過ぎの老人なんだ。物音を立てずにひと突きにするのは、実は朝飯前だったと思うよ」

「じゃあ、あの時の大河内さんは？」 手斧を振りあげた大河内氏の姿がまざまざと蘇ってきた。

「もちろん、本気で僕たちを殺すつもりだったのさ」

真弓は、あらためて聞かされた真実の恐ろしさにめまいを覚えた。

「呑気なふりをして君に叱られたけど、僕だって、逃げ道はないかと必死に考えていたんだよ。恐怖の叫びをあげて命乞いをするのは、まったく無益だと分かっていた。もうだめかとも思ったよ。その時、ふと天から降ってきたかのように、大河内さんと天羽さんが一緒にいたことがないという、ただの偶然の出来事に気がついたんだ。あとはそれを核にして、思いつくままに屁理屈を並べただけだった……夢中だったよ」

仰ぎ見る霧ヶ岳の山頂付近を輪郭どっていた夕暮れ色は、気づかぬうちに藍色の夜空に溶け込んでいる。霧岳荘から漏れて話し声も、いつの間にかまばらになっていた。人々はもう、各自の部屋に引き上げはじめたのかもしれない。

「雅人くん」

真弓は目を閉じて、そっと雅人の胸にもたれかかった。雅人はびくりと身体を硬直させたが、おそらく真弓自身が、自分の大胆さにもっと驚いていた。

「ありがとう、あたしの命の恩人よ」

「い、いや、小松さん、僕はね、ただ――」雅人はしどろもどろになった。

「もう、その『小松さん』っていうのはやめて」

真弓は雅人の胸のなかで、真っ赤になって訴えた。

「あたしは真弓、あなたは雅人くんよ」

「真弓……さん？」

それっきり二人は押し黙ってしまった。なにも口に出す必要がなかった。幾千万にのぼる夜空の星が、寄り添う二人を暖かく見守りつづけていた。

(ワセダミステリクラブ学年同人誌「IQ」創刊号〔1981年〕)